

27 鈴木理一郎の目指したもの

著 者 岡本 春一

鈴木理一郎は非常に気骨のある人柄で、我々凡人とは異なり、自分の信念を貫き通した人物でありました。明治 20 年（1887）伊達方に生まれ、小学校卒業と同時に静岡の漢学塾で英語を学び、静岡中学校へ。熊本第五高等学校から、京都帝国大学政治経済学部を大正 7 年（1918）に卒業、関係する商社等に一時勤めますが、大正 12 年（1923）10 月弱冠 36 才の若さで掛川町民一致の推薦で掛川町長に就任します。



掛川町は山崎千三郎町長の見事な活躍で、浜松に次ぐ発展を遂げましたが、明治 29 年（1896）山崎千三郎町長が亡くなると、途端に掛川の町政がカラ廻りを始め失速して、大正 12 年迄 27 年間に 18 人の町長が入れ替ったり、町長を勤める人が無く、掛川町にあった小笠郡役所の吏員が町長代理をすると云う、誠にお粗末な体たらくな町政の運営時代が続きます。

大正 12 年（1923）鈴木理一郎町長は就任と同時に取り組んだのは、山崎千三郎と同様に県下に先駆けて、大英断を以て掛川町政の創建に取掛り、完遂させる事に依って汚名の返上を図って行きます。エピソードとして伝えられている事は、常に 2 箇の懐中時計を持参して、少しでも遅れて出勤した吏員や、町議会に遅れて来た議員には厳重な忠告を与え、旧来の腐れ切った悪習を断ち切り、体質改善を断行して町政、町議会を本来の姿に立ち直らせたと云われています。

更に就任と同時に町長として取り組みを決断したのは、掛川町の最も課題である水道事業です。「嫁にやるなら町（掛川）にはやるな、水と洗濯で苦勞する。」と迄云われていた難題があった。また山崎家でも取り上げた様に明治 6 年（1873）函右日報新聞の報道に依ると、「掛川宿には 10 ヶ所の井戸しか無く、旱魃で既に 5 ヶ所は井戸水が枯れ、手桶一杯の水を汲むのに 20 人程の先客を待つほどで、町を逃げ出す人もある。」と、水源に乏しい町であった。従って最初に手を付けた水道は木管の為に漏水が多い欠陥水道であった。そのうえ水源に乏しいので各地の水源を探し求めた結果、逆川・倉真川合流点に良質の水源を見付けて、大正 15 年（1926）理一郎町長は、低圧鑄鉄の水道管に変え、県下に先駆けて大英断を以て水道創設事業に着手し、完遂させて掛川の汚名を返上させました。

昭和初期になると軍事目的もあったが、遠美鉄道(旧国鉄二俣線・現天龍浜名湖鉄道)の創設も話題になったのを期に、地域利便を図る為にも積極的に誘致運動に鈴木理一郎町長は乗り出しました。

昭和 29 年(1954) 政策面では一回り大きい掛川町の発展の構想を練ります。財政の健全化と組織の充実を兼備した町村合併を試みます。手始めに曾我村、東山口村を合併させて、新しい掛川市を誕生させます。そして自ら初代の掛川市長となります。更に昭和 32 年(1957) までに旧掛川市全域の合併を完成させ、新しい掛川市を成立させます。在職 25 年と永年のこうした御苦勞に対して、掛川市は鈴木理一郎に名誉市民の称号を与える事になりました。

更に行政を機能的にする為に、昭和 31 年(1956) 6 月二の丸御殿より南に当たる三の丸広場に近代的機能を備えた新庁舎を完成させます。事務能率の効率化を図ると同時に市民の利便性を高めました。そして掛川城址、並びに天守閣周辺の整備を行ない、桜・カエデ・躑躅等数 100 本余の植樹をして、掛川城公園の美観整備を完成させ、観光面でも一躍飛躍して行きました。

次に昭和 33 年(1958) 市民多年の要望であった「掛川市立総合病院」の建設を現掛川警察署の地に着手し、老後も安定した医療を受けられる殿堂の建設を試み完成させました。また水垂地区には老人ホーム「桔梗荘」50 名を収容出来るモダンな施設を建造します。この他、時代の進展に相応しい近代的な消防署の設置や、更に各地に時代の要求にこたえて保育園の新設も手掛けます。

得意分野である経済的分野に於いては、大正・昭和初年の経済危機に際しては、米、麦、茶、藁工品等の地方産業に必要な資金の確保供給には一段の努力をされました。従ってこの不況時代を切り開く為に「掛川商工会議所」を開設します。更に大正 12 年町長就任と同時に「掛川信用組合」理事として、県下の何処よりも健全で安定した金融に依り、経済的分野でも手腕を遺憾なく発揮して行きます。

こうした努力の結果、当初「掛川信用金庫」は 2 店舗であつたが、爾来 34 年間の経営努力の結果、広域に発展させ 11 の支店を設けるまでに成長させます。そして県内中堅の信用金庫に成長させて行きました。特に全国で創立百周年を迎えた信用組合として成長させ、大正 11 年(1922)その過半を理事に、昭和 21 年以降は組合長、理事長として在任した事は、理一郎氏の人格識見に依るもので、その功績は素晴らしいものでありました。

また社会貢献としては昭和 28 年(1953)静岡家庭裁判所参与に就任し、昭和 36 年より 13 年間掛川裁判所調停協会会長、並びに静岡地方裁判所鑑定員等、家事民事の調停制度に関与して尽力されました。

また太平洋戦争では、掛川城天主台に在った「戦勝観音菩薩像」が昭和 18 年(1943)軍部に依って、強制的に軍事目標で供出を迫られましたが、断固として断りました。「日清日露戦争で戦没された 1059 名の靈魂を祀る為に、国家の為に尊い命を捧げられた英靈の為に、又数多くの遺族の心境を考えれば、観音菩薩像を供出する事は出来ない。」と堅く断り続け、終戦まで貫徹させた事は有名な話です。

更に昭和 38 年(1963)には、掛川ライオンズクラブ創立に当たって、委員長として地域の社会福祉に貢献したばかりでなく、ご自分の御遺体よりご自身の眼も、盲人視力回復に提供者として率先垂範し実践されました事は、常人の考えの及ばざる事です。

其の他、教育の振興からは、戦後のベビーブームに対処する為に、不足する小中学校の校舎の新改築には最も心を砕き、市長として市財政の緊迫する中で一大事業を組み、その解消の為に貢献して行きました。昭和 41 年勲五等雙光旭日章、55 年正六位を授与されています。

最後に江戸時代以来、世に残る一大事業を行った人物は、その業績を後世に残す歴史書を後世に残して行きます。平成年間には榛村純一市長が掛川城天守閣の建造、新幹線掛川駅導入、全国に先駆けた生涯教育等々功績と共に『掛川市史』の刊行をしましたが。鈴木理一郎も先史以来の歴史の流れと、大正昭和混乱期の打開に一身を投げ打った成果を『掛川市誌』の編纂事業の「顧問」として指示し、自己の集大成とも云える大事業の一端も歴史書として昭和 43 年(1968)出版して、大きい足跡を残しケジメを付けております。

なお鈴木理一郎家では旧家保存の為に、現在「古民家活用研究会」が立ち上げられ、平成 30 年 9 月第 1 回の会合が開かれています。

以上、掛川市の諸家の長い歴史を振り返って見ると、掛川市域の江戸時代・明治と大正、昭和の各代を支えて来たのは、この他諸家の目覚ましい活動もありますが、その中で特に目を引くのは、寺ヶ谷出身の「松ヶ岡」山崎万右衛門家と(晨園)・(千三郎)、並びに伊達方の「滑川」鈴木九郎左衛門家と(理一郎)、更に同郷の石川惣太夫家と(依平)並びに「宮村」の榛葉武太夫家と(榛葉虎之助市長)等の活躍と存在が大きく目立ちます。この過去の歴史を振り返り見る時、東山口地域の人物が掛川市発展の基礎作りに大きく関り、集中したのも何かの深い因縁を感じます。